

がっこう・N.P.O.



第137号

学校をつくろう!通信

学校の役割

その 116

前号の最後に「一つとても重要なことがあります。共鳴体であればなんでもいいわけではありません。例えばポピュリストの演説、時として恐ろしいほどの一体感です。その行き先の悪夢を私たちは知っています。何がそこに立ちふさがることができるのか。教養です」と僕は書きました。今回は、前号で引用させてもらった大学の学長さんの記者会見でのコメントをもとに教養について考えたいと思います。

学長さんは自身の学校の生徒や学生、教職員が受けたハラスメントに対して「教養教育をさらに充実させなければという思いを強くした」と記者会見で述べました。新型コロナの感染の広がりという社会状況が生んだハラスメントに対してです。学長さんの言う「教養教育の充実」はハラスメントを受けた自分の学校に対しても向けられている言葉です。ハラスメントに対する非難ではなく、ハラスメントを生み出す状況に対する批判から生まれた言葉です。ハラスメントを犯してしまった個々の者に対する非難ではないのです。大切なことだと思います。

否定の言葉は自身にも向けられて初めて批判になります。ハラスメントを非難することは必要なことだと思いますが、同時に批判はもっと必要です。批判は非難する自身に対話の力をもたらします。つまり、非難はモノログ(独話)なので相手に届きません。独り言です。ブーメランのように相手を掠めて自分のところに帰ってくるような言葉が批判です。相手に当たってはいけません。掠めなくてはいけません。悪口もお世辞も憂さ晴らしで、その場で消えてなくなるバブル言葉で、ほどほどがいいのですが、

それを繰り返していると世間はそっぽを向くだけになります。憂さは憂さを呼ぶことになります。

ちょっと話題が逸れますが、ヘイトスピーチは集団バブル言葉で、世の中のモノログ化を如実に示しています。虫歯のようなもので、放って置くと他にも移り、困ったことになります。表現の自由を盾にしますが、表現は他者がいてはじめて、成立するものです。他者とは自分とは異質の存在です。物議を醸した愛知ビエンナーレの出展作品に対する抗議と排除なども同じことだと思っています。

話題を教養に戻します。教養とは自身に糊代を作ること、あるいは見つけ出すことだと思います。異質の他者との対話を可能にする精神の有り様です。今の僕に言えるのは、そのあり様とは私たち人類が途方もない時間をかけて気づいた個の尊厳という価値に裏打ちされたものでなければならぬということです。協同性の追求と重なるものです。(時々、人はいつかそれとは異なる価値に気づくことがあるのかも知れないと空想することもあります)森羅万象に対する、もちろん自身も含めた、好奇心が知識を生み、知識は思索を深め、思索は表現を求めます。想像力と共感力を育みます。糊代が生まれるのです。それが学びの姿です。

私たちは日常生活の中で「教養がある」とか「教養がない」とかよく言います。それは決して知識の量ではありません。また、豊富な知識を身につけても思索と表現のための道具として使うことができなければ、知識の価値はないに等しいものです。珊瑚舎は生徒も教員も自らの教養のあり様を模索する場としてあり続けたいと思います。(ほ)

がじゅまる しんかめちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

毎年6月23日の慰霊の日は特別授業を行っています。講師の方をお招きしてお話を伺ったり、フィールドワークに出掛けたりしています。

今年は初・中・高等部の生徒たちが沖縄島南部の戦跡や慰霊塔を回りました。戦後最初に建てられた慰霊塔と言われる魂魄の塔、平和の礎のある平和祈念公園、糸満市真壁・国吉集落にある戦跡を回りました。

「あの年は雨が多かった」と語られる沖縄戦ですが、当日朝も大雨や雷の大荒れの天気でした。雨を避けつつ、歩きながら立ち止まりながら、考えるフィールドワークとなりました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「慰霊の日」特別授業

中等部 大湾 真美

6月23日の慰霊の日は、私の住む沖縄では大切な日。沖縄戦などの戦没者を追悼する日です。

私は、珊瑚舎の人たちと一緒に、ガマや資料館、魂魄の塔などに行きました。

一番印象に残ったのはガマでした。初めは防空壕とかガマは何が違うのかと思っていましたが、中に入ってすぐにわかりました。防空壕は、人工的に作られているのに対し、ガマは自然にできた洞窟なのだと思います。ガマの中は暗く、明るい昼頃だというのに、ガマの奥は暗くて何も見えませんでした。でも、ガマの中は夏の暑さは感じられないほどに涼しかったです。耳をすませば、水滴の音も聞こえま

した。

戦争当時は、このガマの中にたくさんの人が逃げて生活していて、赤子のいる女性たちは苦しんだと思いました。ガマの中は声がよく響き、赤子の泣き声で場所がバレるかもしれなかったので、赤子連れで出て行くか、赤子を殺さないといけなかったからです。

他にも、ガマの中に爆弾を投げ殺したという話も聞きました。

この話を聞き、戦争はもう二度としてはいけないと思いました。戦争は勝っても負けても、両者ともかならず死人は出す。大切な人をなくす人は両者ともにいます。

今私の心の中には話しをしてくれた戦争体験者が言った言葉が、今でも心に残っています。

「戦争は人が人でなくなる」という言葉です。

たしかにと納得しました。両者ともに心に大きな傷を残します。お国のためといい自爆する人、人を殺したくないのに殺す人。

誰だって死にたいと思う人はそうそういません。軍人は命令で人を殺し、民間人は防衛で人を殺します。そういったいろんなことの連鎖で「人が人でなくなる」と私は解釈しました。

こういった経験を通して、自分も平和な世の中を作っていくために、自分にできることを実行していきたいです。



「珊瑚舎ハーリー大会」

中等部 山川 虎雅

今年の馬天ハーリーはコロナの影響で中止になりました。

でもどうしてもハーリーをしたい、だから珊瑚舎だけのハーリー大会をしよう！と提案して、実行委員会を立ち上げました。

そしてハーリーをするためにタケチャンや事務局と練習日や当日の流れとか場所を決めて企画書を作り、佐敷漁協組合長の山入端さんをお願いをしました。山入端さんから「練習は3回までならいいよ」と言われ、それで決まりました。山入端さんには、毎年馬天ハーリーで練習の時や本番でカジ取りや漕ぎ方を教えてもらっています。

珊瑚舎のハーリー大会をすることが決まった後は、練習日を決めたり、人を集めたり、サバニに乗る人の配置やチーム決めなどをしたりしました。

ハーリー当日、応援する人や漕ぐ人が思った以上にいてびっくりしたし、対決した時も知ってる人同士だったから、めっちゃ気合が入って漕ぐのも楽しくって、やって良かったと思いました。

ハーリー大会を一から企画してみて、最初は、本番と練習日だけ決めれば大丈夫だろうと思ってました。けれど、やっていくうちに場所は？許可は？人集めは？とか、いろんなことが出てきて、一から何かをするっていうのは、難しいと思いました。でも最後までやったぞー！っていう達成感や、最後にお疲れさまでみんなから言われた時の喜びはめっちゃありました。

今年は、いつものハーリーとは違う形だったから楽しいかな？とか、みんな来るかな？っていう不安があったけど、やってみると楽しかったし、OB(卒業生) vs 生徒とか講師 vs 生徒とか普段できないような対抗戦もできて、新しい楽しさが発見できたからやってみて良かったなと思いました。

ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

高等部・ことば(英語)担当 與世田 百花
今年度高等部の「ことば：英語」の時間を担当させていただいている、與世田百花(よせだ ももか)です。週に2回、高等部の「ことば：英語」の時間と朝の英会話の時間にお邪魔しています。自分が書いた文章を誰かに読んでもらうことは久しぶりなのでちょっと緊張していますが、私が担当している、高等部の「ことば：英語」の時間について書こうと思います。

5月いっぱいオンライン授業の期間が終わって、初めて高等部のみんなと直接顔を合わせた日の授業では、「Let's Introduce Your Friends!」という活動をしました。高等部にいる自分以外のメンバーひとりひとりを紹介する文を英語で書く、という内容です。書き上げた文のほとんどが「He is ○○。」や「She is ○○。」のような、シンプルなものでした。文法のレベルとしては易しいし、簡単に済ませようと思えばすぐに終わるような活動です。ですが、みんな時間をいっぱい使って、一生懸命取り組んでくれました。自分の友達はどうな人だろうとじっくり考え、さらにそれを英語で表すならどの言葉が自分の納得のいくものなんだろうと迷う様子もありました。家族や友達など、自分にとって大切な人にあげる言葉ほど、自然と大事にしたくなるものだと思います。なので、友達のことを考えて丁寧に言葉を選んでいく様子に高等部のみんなの関係性が少し見えた気がして、これからみんなと一緒に時間を過ごすことがもっと嬉しくなったのを覚えています。

私もそうですが、高等部のほとんどの生徒にとっての母語は日本語です。自分の気持ちや考えを表現しようとしたとき、日本語だとすんなりできることも、英語だとそう簡単にはいかないことがよくあります。自分の伝えたいことをうまく表現できなくてじれっとなることもあります。自分の気持ちを表すのにぴったりな言葉はなんだろうと、じっくり丁寧に言葉を探す時間はすごく素敵だなと感じます。「ことば：英語」の時間で母語以外の言語を学ぶことが、高等部のみんなにとって、言葉と向きあう一つのきっかけになるといいなと思っています。

先週、前期の「ことば：英語」の授業が終了しま

した。後期の私個人の目標は、みんなが自然と一生懸命考えたくなくなってしまうようなトピックをたくさん持ってくること。そして、初等部と中等部のみんなの名前も覚えて挨拶できるようにすることです。夏休み明け、週に2回みんなに会えるのが楽しみです。



沖縄だより

「サバ日記」パート2

安田 ふみ (2015年度卒業)

サバニを再生するというのは、どういうことなんだろう。そこにあいた穴をふさぐこと。使わない余分をのけること。腐れたクギを掘り出し、痛んだ箇所をすげかえること。

作業は、タケチャンとスギウラさんが芯となって進んでいく。ほとんど毎日のように、サバニのそばには人がいた。一緒に、サバニの再生作業をする人。おにぎりやおかず、菓子を持ってくる人。たまたま山がんに遊びにきた人。いろんな人がくる。

「サバニ、きれいだね」って誰かがいうと、嬉しそうに、誇らしそうにタケチャンが微笑んだ。

作業の中で、サバニに打ち込んであるフンドゥ(くさび、鼓型で、イヌマキで作られる)を取り出すことがあった。本当に驚くことに、取り出したフンドゥはヒビ一つなく、美しいあめ色に鈍く輝いていた。このサバニ、少なくとも50年は生きてきたのだと聞いている。

手の中にあるフンドゥは、軽いのに重く感じた。太陽は昇り、蚊は大量発生し、弁当は売り切れ、犬は糞をする。サシバは渡るし、マンゴーの花は咲く。

作業が終わると、使った道具をしまう。ノミを研ぐ。ゴミを払い、木クズを燃やす。その火で、イモやナスビを焼いたりする。マシュマロを竹にさして炙る。雨よけのために張ったテントの陰で昼寝をする。

サバニの絵を描きながら、サバニにのって海にゆく日を想う。どんなにすてきだろうか。サバニはきっと、沈まない。完!

*現在、サバニは再生し、舟体にはトウブユ(飛び魚)が跳ねている。進水式も行われ、珊瑚舎の皆と共に、生きている。

*サバニとは(通信136号に同じ)

語源としては、「サバニ」。サバ(鮫)のシニ(胸)という言葉からきている。琉球舟。美しい(美舟)。木を焼き、炭にしながらくり抜いて作る「クリ舟」から、杉の木を竹クギなどでつなぎ合わせる「ハギ舟」、現在よく見かける船へと琉球の歴史や生活と共に変化している。現在漁業ではエンジン付きのものが主流となっているが、沖縄各地にまだハギ舟作りやその作り手が残っている。この文章では、杉材と竹を主として作られた手漕ぎの舟を指す。馬天ハーリーでは鐘打ち、舵取り合わせ12名が乗る。

学校をつくろう!



ホームページの問い合わせ欄に、ウーフというシステムでボランティアをしながら様々な国を回っている方から、珊瑚舎でボランティアが出来ないかとメールが送られてきました。卒業生の紹介でした。フランス人の彼は、日本でオールドタイプスクールを回った後、ヨーロッパに戻って同じような学校を始めたいのだそうです。珊瑚舎ではウーフシステムはありません。しかし、コロナ禍が落ち着いた時期だった

ので、生徒達がいろいろな国の方と接する事は自分の世界を広げる良いチャンスになるだろうと受け入れる事になりました。寮で寝泊まりと食事を提供する代わりに珊瑚舎で英会話やことば(英語)の授業、その他のボランティアとして学校生活に関わってもらいました。約2カ月弱ですが、ボランティアで入ってくれたアレックス・コーレンさんが珊瑚舎で過ごした感想を書いてくれました。その和訳をお読みください。

アレックスの珊瑚舎でのウーフィング

WWOOF(ウーフ):お金のやりとりのない「人と人」との交流。ボランティアはホスト(通常は有機農家)の仕事を手伝い、ホストはボランティアに、生きていくための経験および食事と宿泊場所を提供する。

プログラムが始まってから感じたことは、この学校は以前に所属した所とは対照的で、とても整ったシステムで運営されているということでした。また、そのシステムに沿って柔軟に対応する組織であるとも感じました。学びの道筋を与えながらも到達するためのゴールは定めないため、プレッシャーを感じることなく独創性を発揮し、自分自身でいることができます。

ボランティアを始めた当初は英語のクラスを教えていただけで、どちらかと言えば自分が生徒であるかのように感じていましたが、そのうち他のクラスにも参加するようになり、沖縄の文化や自然、芸術などを体験する絶好の機会となりました。

ただ時折、ボランティアとしてこの学校に来た私としては多くのことを学ぶばかりであまりできることがなく、不平等さを感じていました。

しばらくすると、朝の英会話レッスンを担当するようになり、その後、ヨガやワークショップなど、私が学校で一番やりたかったことを行うことができました。朝のこの時間に間に合うように来る生徒たちが毎回違っていたので完璧なものではありませんでしたが、学期の終わりの「まにまに祭」(前期学習発表会)準備期間中にできる最善の方法だったの

で、私はそれでも満足でした。

私が日本語を話せないことに加え、日本の人たち、特に生徒たちは恥ずかしがり屋で日本語以外の言語で話すのを怖がり、コミュニケーションを取るのが難しい時もありました。彼らが私と話したがっていることは分かりますが、私から話かけなければ、ほとんどの場合会話ができませんでした。とはいえ、それは時々とても面白い状況を作り出し、彼らが自信をもつごとに日々改善されていきました。

生徒たちがお互いに助け合う姿も多く見られ、この短い期間に彼らのほとんどに大きな変化が起こったようでした。彼らは学校を居心地良く自分自身でいられる第二の家にしようとしています。それは見ていてとても美しい光景でした。

また、これは私にとって初めての経験でしたが、珊瑚舎と寮のスタッフは文化の交流にとっても協力的で、周りのすべてのことを私に教えてくれ、沖縄の文化についても熱心に伝えてくれました。

寮では問題なく生活することができました。日中に起こった出来事も経験した気持ちも開放することができ、瞬時に緊張がほぐれて平和な状態にもどれる場所でした。これはそこに住む人々によって創られる雰囲気のおかげだと思います。一緒に暮らしたり、平和を感じられる人たちと出会えたりするのは、そうめったにあることではありません。

「まにまに祭」はとても興味深い経験でした。生徒や先生たちは得るものが多かったでしょう。この学習発表会は創造的であるための、あるいはそれぞれがベストをつくし、チームワークに磨きをかけるための大きなきっかけとなりました。これらは私たちの限界を超えさせ、成長させるものです。

また、ステージに上がるということは心地よい場所から出て自分をさらけ出すということです。これは怖いという気持ちを自分でコントロールする方法を学ぶ良い練習になり、自分を開放して新しい何かを経験することにもなります。こうした体験をすることで、彼らは心を開くのです。

ただ、英語の漫画劇発表では、保護者の期待が大きかったことで、私は残念な気持ちになりました。大きな期待はプレッシャーを生み出し、それによ

て個人の能力が制限されてしまいます。そんな印象を受けました。

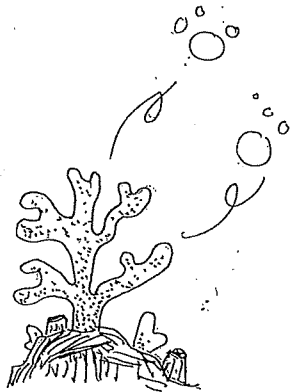
覚えておいて欲しいのですが、私たちが何をするか、何者であるか、ということとはあまり意味がなく、大切なのは私たちの日々の進歩と、進化です。ですから、誰かが失敗したり、自分を信じられなくなったりした時は、その人を元気づけ、助けることが必要です。結果ではなく、挑戦したことそのものが素晴らしいことであることを彼らに伝えてください。

結局のところ、この経験はとても面白く、私は準備期間も彼らの舞台発表も本当に楽しむことができましたし、とても良い成長の機会でもありました。また、生徒たちと先生たちにとっては、去年と今年の「まにまに祭」を比べて変化を見ることによって、得たものを感じられたのではないかと思います。そして、彼らは上達したということを確認し、楽しみ、さらに自分達がやりたいことについてもっと、何ができるだろうかと、自分達で見つけ出すでしょう。

最後に、私は日々の中で目的を実現することができたので、この経験に幸せを感じ、とても感謝しています。学ぶと同時に、同じ目的を持つ人々と共有しあい、より良い雰囲気を作り出すことができました。この1ヶ月だけでも大きな変化があったので、もう少し長くいることができればさらなる変化があったに違いありません。

共有してくださった全ての人に感謝いたします。ありがとうございました。

ポリプのゆくえ



珊瑚舎から旅立ったポリプの幼生達（卒業生、講師、そのほか巣立って行った人たちが）、定着した先々で今どうしているのか。リレー形式で綴ってもらいます。

「私の中の宝物」

手塚 みお

こんにちは。専門部卒業生のみおです。1期生でした。珊瑚舎スコーレを卒業してはや20年近く。私は今年で39歳です。えんどもの文章講座で「自分の死に方」を書く授業がありました。私は80歳くらいに和歌山の梅林で寿命を全うし、骨は黒潮に流すという人生を思い描きました。人生折り返し、これを機に自分の半生を振り返ってみようと思います。暇な方はお付き合いください。

珊瑚舎を卒業して2年位は沖縄でフリーターをしていました。その後、やはり何かをつくる・視覚で表現する仕事をしたいと思い上京。東京の小さな学校に1年通います。田舎育ちのゼロからの出発だったので最初の頃は右も左もわからなく大変でした。そして東京の家賃や物価の高さに驚きました。貯金ほぼゼロ、仕送りなし、無計画で上京したのでとにかくお金がない。学費と生活費を稼ぐので毎日が学校とバイトの日々。夜もほぼバイトで身も心もボロボロでした(今でも思い出すと泣きそう...)。そんな毎日なので学校の課題に取り組む時間もあまりとれなく、この生活を続けるのは無理だと判断し1年で辞めて、まずは就職をしようと決めました。未経験でも雇ってくれる会社を探し面接し有難く採用してくれた会社の延長で紆余曲折ありながらも、今も同じ仕事をしています。そこは広告の制作会社でした。そこでデザインの勉強もさせてもらいながら働きました。覚えることが沢山でそれなりに大変でしたがとにかく一緒に働く人、周りの先輩が良い方ばかりで環境が良かったので毎日楽しく働けました。その会社で出会った人と結婚し出産し、今に至ります。今、子供は6歳のわんぱくな男の子です。夫が5年前に独立しそこで私も働いています。

ここまで書いて自分でも驚くくらい書く事がないことに気が付きました。思い返してみると、子供が生まれる前も後もとにかく仕事が忙しく毎日働き詰め、あまり自分を省みる事ありませんでした。が、コロナの影響で少し状況が変わりつつあります。在宅勤務が主になり、少し自分の時間も増えました。息子から七夕の時期に「ママの願い事はなあに？」

と聞かれました。私はしばらく考えて「自分の描いた絵でたくさんの方が楽しくなるといいな」と答えました。するすると出てきた答えに自分でも少し戸惑いました。言ったからには実践しないとなあ。

5年後、10年後の自分がどうなっているか今は想像ができないけど、少しは余裕ができてくるかな。その時は和歌山でも行ってみようかな。

今まで大変な事もあったけどその度に周りの人や縁に助けられてきたように思います。珊瑚舎スコーレで出会った濃ゆい人たちを今でも懐かしく思い出します。その時は大変だったと思っていたけど思い返すと全ての出来事が楽しくて有難い事でした。

自分を健康に前向きに育ててくれた両親には常に感謝です。これからも感謝を忘れず我武者羅にかつ丁寧に生きていたいと思っています。

(2002年度専門部卒業生)

マチカンテイー



(夜間中学校のコーナーです)

“まちかんてい” (待ち兼ねていたよ) は「7歳の時から自分が通う学校がいつか出来ると思って、60年待ちました。夢は実現するものですね」と話してくれた生徒の言葉からもらいました。

連載 聞き書き その72

<S・Kさん談>

昭和8年生まれです。北部の羽地で生まれました。母と兄2人、母方のおばあんの5人暮らしでした。父は私が一歳になる前に別れたということで顔も分かりません。

1944年の那覇10,10空襲があって、田舎でも戦争が現実味を帯びてきました。と言っても小学3年生ですから、家の農業を手伝いながらのんきに学校に通っていました。ユウナの木で刀を作り振りまわすのが得意でしたよ。(ユウナは木と樹皮がきれいに剥がれるので、鞘を作りやすい) 4月に米軍が上陸する2カ月前ぐらいになって艦砲射撃が村を襲うようになり、部落の人たち14~5名と一緒に山へ逃げました。大きな穴を掘り竹で柵を作りその上に布団をかけてにわか防空壕にして暮らしたんです。その山の中でも艦砲の音が響き渡っていました。水はあっても食べるものがない。そこで飼っていた馬や牛を食べることに。四つ足を縛り、顔が見えないように布で覆ってから、防空壕を掘るために持ち歩いていたツルハシで顔面を叩き、殺します。子どもとしては大人はなんて酷いことをするんだと思いました。が、腹がへっているから結局自分もその肉を食べるんですよ。別の部落の人ですが、出かけたまま戻らず、スパイ容疑で友軍(日本兵)に殺されたという噂がありました。米軍の飛行機から日本は戦争に負けたというビラが私たちの山にも毎日のように降り注いできます。半信半疑でしたが、何人かの大人が部落の様子を見てきて、山を下りました。日本は負けないと信じていたので、まさかという気持ちと耐え難い悲しさがありました。だいぶ後になって6月23日で沖縄戦が終わっていたということを知りました。

学校は米軍に収容されているので、村の広場にテントを建て、学校として使っていました。暑かった思い出しかありません。先生は何人かいましたが、朝礼の後は校庭の石拾いで満足な勉強はありません。腕っぷしも強く、スポーツならなんでもできたので、ガキ大将で勉強なんてと思っていました。ある日部落の青年に米軍の倉庫には食べ物が大量にあると誘われて、好奇心のままに嘉手納まで40キロぐらいの道のりを歩いて行きました。いくつもある倉庫から缶詰を盗んだ帰り道、米兵に見つかり石川にあった刑務所に3週間ぶち込まれました。その刑務所もテントだったんです。でも米兵が逃げようとした人を銃で撃ったので怖くて逃げようなんて考えませんでした。

した。戦争は人を変えます。食べるものがないということが他人のものを横取りしたり、盗むことをいとも容易にしてしまうんです。今の日本は軍拡、自衛隊、アメリカの言いなりなど、支持できないですよ。戦争は絶対にしちゃだめなんだから。

本当は軍作業に就きたかったのですがつてもなく、無理でした。学がないので職も転々としました。農家の日雇い、新聞配達やタクシーの運転手もしたし、内地に行って季節工もしました。結婚し子どもが4人います。昨年妻を亡くし、しばらくは立ち直れなかったですね。そんなころ通っている病院でこのチラシを見ました。ガキ大将でその場その場は楽しかったけど、大人になってバカだったなと思う時がくる。頭を磨いていないと寂しくなる。気が付くのが遅かったと思うが、今ある状態でやるしかない。難しいこともあるが、過去にやっていないんだからと言いつけて聞かせる。この先生は優しい、分かりやすく教えてくれる。学ぶと気持ちが澄んで、明るくなるね。授業で満たされてあの世に行くなら本望ですよ。(笑)

★ ★事務局便り ★ ★

★ 8月1日前期学習発表会「まにまに祭」を行いました。新型コロナの感染状況から言えば沖縄が感染率ワーストワンです。その中で行うことは不安でしたが、昼・夜の生徒からこの行事だけは中止にしないよねと言われており、ズーム配信という形も取り入れて行いました。生徒たちは今までと違う発表会に戸惑う場面もありましたが、しっかりとした表現ができたと思います。

★夏休み前、3日間連続で「がんまり」の作業をしました。新校舎の植栽の手入れ、山がんまりの草刈りなどです。連日の猛暑で熱中症対策をしながらの作業が続きます。4月からはコロナの影響で、山がんまりでの食事作りも中止していますので、いつものお楽しみもありません。そこで思いついたのが“水かけ祭り”です。山がんまりは天水を利用しているので、水はとっても貴重です。少しでも水を流しっぱなしにすると、おーい！！と声

がかかります。ですから生徒の一人は、いいの？大丈夫かなと不安顔です。ペットボトルに水を入れてかけあうという超単純なことですが、始めてみると、生徒もスタッフもそれぞれが水の掛け合いに熱中。台所のボールやひしゃくを持ち出す人もあり、キャーキャーの音が響きます。一時間あまり、終わった時は全員ぐったり。山がんまりで一番興奮したとか、いい顔をしていました。

★ 通信135号に「子どもがんまり」の参加者が「ふくぎぞめってたのしいな。てきとうにやってもどんなようにやってもいろんなかたちにしてもかわいくおもしろい。」と感想を寄せてくれました。これを読んだ船橋市の女性が「7歳の少女のきらめくような言葉に出会いました。これを縁に沖縄染色関係の本をお贈りしたい」と申し出て下さいました。珊瑚舎には紅型の授業もありますので、貴重な資料を有難く頂戴しました。

★映画「ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記」の上映会が各地で開かれています。

- ・沖縄市 「音市場」 8月2日～8月30日
- ・京都 「京都シネマ」 7月24日～
- ・大阪 「大阪第七芸術劇場」 7月25日～
- ・金沢 「シネモンド金沢」8月8日～
- ・富山 「ほとり座」

★ ★ ★

●今年度(6月1日～7月31日)寄付・カンパを頂いた方々
 石田みどり 鹿糠文子 坂本和子 岡村健手塚賢至 照本祥敬 市野寿子
 当山幸江 森口美千恵 三浦幸子 山田道子 助川寿美子 式部恵子 丹羽
 雅代 儀勝子 与那覇晴海 湯本貴和 上田秀一 大城喜春 北上田登久
 子 盛口佳子 真津昭夫 家門収一 長嶺由紀子 橋川由美子 小渡律子 幸
 地江美子 城間あずき 松茂良米子 名城悦子 所扶久代 石野裕子 矢崎
 智章 尾崎せき 松田晴代 萩原真美 城間栄順 村上呂理 伊波雅子 仲里
 博彦 下地孝野 村佳雄 西山哲平 智海竹内 新大城博長 美枝子 野村佳
 雄 城間文雄 藤田ラウンド 喜納みゆき 金城幸子 西原邦男 橋川由美
 子 奥本さつみ 平良那愛 親川裕子 泉恵子 辻口光生 丸谷彰 長谷川途
 子 砂川昭俊 坂本新一 朗久 保礼子 神谷郁雄 小峰阿也子 友寄和子 穴
 田浩一 安里洋子 宜保洋子 永田満中地 八重子 比嘉政秀 太田紀子 岸
 本千賀子 大垣千鶴 濱崎輝夫 柴田健有) ラポータ山城千秋 古堅苗屋
 富祖昌子 三上亮子 志賀マサ子 安田圭太郎 瑞慶覧 陽子 菊入直代 浦
 川祥子 浦川聖長 嶺潤子 鈴木和男 株) サンシャイン 仲本多美 知念敏
 則 横塚美幸 匿名2名

発行者 : 珊瑚舎スコーレ事務局 遠藤知子
 住所 : 〒900-0022 那覇市樋川1-28-1-3F
 Tel : 098-836-9011 Fax : 098-836-9070
 Mail : sango@nirai.ne.jp
 URL : <http://www.sangosya.co>